

BOOK REVIEW

「これからの経済学」

佐和 隆光 著

自由主義諸国における経済事情の変化は目を見張るものがある。さらに社会主義諸国における市場経済体制への転換も本世紀最大の経済事象といえることができる。つまり、世界の経済は大きく揺れ動いているのである。

本書は、京都大学経済研究所長である著者が、一九八二年に刊行した「経済学とは何たるか」の続編として書かれたものである。岩波新書であるから、平易な著述と予想したが、必ずしもそうではない。ここでは、評者が一読して感じたことを中心に述べてみたい。

本書は五章編成となっている。第一章は「経済学の過去と現在」

で、一九八〇年代の経済学は世界的に「保守化」の時代であり、日本でも自由化・民営化が進行したが、自由社会の前提条件の立ち遅れを指摘せざるを得ないとしている。

第二章は、「ケインズは本当に死んだのか」である。ケインズの『自由放任の終焉』の地球版、つまり、南北格差の拡大、東欧激変という地殻変動の余勢をかって、今よみがえろうとしている。市場万能主義に対する人間理性の介入を是とする立場である。

第三章は、「一九八〇年代の思想潮流」である。ここでは、日本経済学（ジャパノミックス）の可能性とその思想構造に触れ、日本

式制度・慣行は「効率性」、「経済性」の犠牲の上に、自然環境の保護とか人間性を優先するはずなのに、なお効率性を求めるのは何故かとの疑問をなげかけている。

第四章は、「ソフト化時代と経済用語」である。社会科学の中で経済学ほど専門用語の多い分野はないことを述べた上で、「生産」の概念にふれ、「モノの生産」のみならず、「サービスの生産」、「付加価値を生み出す営み」へと変化していることに注目すべきことを指摘している。

第五章は、「これからの経済と経済学」である。政治にせよ、経済にせよ、歴史は、保守からリベラルへ、効率から公正へ、新古典派からケインズ派へ、といった具合に、それぞれ両極の間を振り子のように、行きつ戻りつを繰り返すものであることを認め、終わりに「なせいま地球環境なのか」、「効率第一主義への反省」などに言及している。

紙幅の関係で、拾い読みに終わった感があるが、本書の論点を要約すると次のようになる。

すなわち、一九八〇年代は、アダム・スミスらの保守派経済学が再起し、経済理論にとっては保守化の時代であった。だが、一九九〇年代の価値規範は、「保守からリベラルへ」、「効率から公正へ」、「競争から協調へ」、「経済成長から環境保全へ」、「東西緊張から東西融和へ」といった経済学のパラダイム・シフトが起こるに違いない、ということである。

評者は、この中で「経済成長から環境保全へ」、「効率から公正へ」の二点を特に重視したいと思う。その背景には、農林水産業の社会・経済的な多面的役割を強調したいことと、「自然と人間の共生」論に共鳴するからである。また、人間の真の豊かさは「効率と公正の共存」にあると信ずるからである。

終わりに、著者の「豊かさのゆくえん（岩波ジュニア新書）の併読をお薦めしたい。

（本書は、岩波書店発行、一九九一年四月刊、定価五五〇円、
評者、財団法人北農会事業部長・沼辺敏和）